

(完成近い黒西ダム)

編集委員会では最近名誉員になられた土木界の長老の方々や、これから土木界へ進まれる若い学生諸君に感想文の提出を御願ひ致しましたところ、非常に多くの原稿が寄せられました。紙面の関係で一度に全部のせられませので、逐次この欄で御紹介いたします。なお、多少の加除修正をさせていただいたことを御断わりいたします。御多忙のところ御執筆いただいた各位に対し、紙上より厚く御礼申し上げます。 【会誌編集委員会】

名誉員 金子 源一郎

昨年5月の総会で本学会の名誉員に推せんされたことは身に余る光栄と思う。しかし、かえりみて土木工学界になんらの業績もあげた思い出のない私としては、ちくじ(忸怩)たるものがある。多分長年土木関係の仕事にたずさわっていたということから選ばれたことと思う。

その長い間に経験したこと、感じたこと、失敗したことなどのうち、若い会員の方々に参考になるようなことを書くようにとの注文を受けたので、まず失敗の話をする。

それは昔、やったことで近頃気づ



金子名誉員

いたことである。私が大学を出て最初に勤めたのは、東京市の下水道であった。関東大震災の当日、私は呉服橋工営所という、当時の呉服橋(現在は外堀を埋立てたためなくなっている)のたもとの銭瓶町ポンプ場敷地内にあった下水工事事務所の所長室にいたのであるから約40年以前のことになる。当時私はポンプ場ならびに中央区の全部千代田区の一部にわたる一帯の下水道の設計と施工を担当していた。私はその後、国の機関としてできた復興院の方へ移ったので完成までは関与しなかったが、計画の責任の一半は負わねばならない立場にある者である。ポンプ場はその後二、三年して竣工したので、今日まで40年近く働いてきたわけである。ところが今回その扱う汚水量が計画のものに倍加したので、拡張のため隣地に移転することになったのと、高速道路の新設のためポンプ場の敷地の一部が使われることになったのとで、ポンプ場をふくめて、この付近一帯の土地の区画整理を行なう案が先日的首都圏整備

審議会で決定したことである。私はいま首都圏整備委員会の委員を勤めており、この案件上程に関係するにあたって感無量の思いがあった。

古い公共施設が環境の変化につれて改変してゆくことはしばしば見ることであり、いたし方ないことであるが、下水道のような都市にとっての基礎的施設はかなり長い期間役立つねばならぬと考えているものの一つである。ポンプ場の拡張は当然その水より先の汚水幹線全部の改造、あるいは増築をとまなうであろうから、なかなか重大なことになる。かかる施設は少なくとも50年以上、できるなら100年くらいも役に立つだけのものを作らなくてはならないと思っていたのであるが、銭瓶町ポンプ場の場合は遺憾ながら40年たらずの寿命となってしまった。東京の発展、特に都心部の将来に対する見とおしにつき、配慮がたらなかったことを悔いる次第である。

次の話題に移る。一身上のことで思いついたことである。私は45年にもおよぶ長い経歴にもかかわらず本当の意味における専門がないということである。もし私が終始同じ分野の仕事にたずさわっていったならば、豊かな経験を体得した斯道の權威となっていたかも知れない。私はその間に6回も勤めも身分も変わったが、住所は移らず、終始自宅から通勤できたので、私生活には都合が良かったが反面、仕事の内容は転々として、ついには専門のない人間になってしまった。私の友人には終始トンネルとかダムとかの仕事に従事して仕事のために住居を転々とした人もある。家族の人数には気の毒なこともあっただろうが、本人は専門に徹することができて斯道の權威として大成している。いずれを選ぶべきか、もし自由に選べるものならば技術者としては当然後者でなければならぬ。もっとも前者すなわち私のようなめぐり合わせになった者で

も、そのたずさわった仕事の内で、特に興味をひく題目をとらえ、爾後もその問題を放さず、当面の仕事の移り変わりとは別の研究を掘り下げその問題の権威となる心がけを持って別であり、技術者としては、この心がけを持つことが肝要であると思う。そのためには土木学会館は研究のための会合、図書の閲覧に大事な施設であり、会誌は研究発表の大事な機関であり、大いに活用されなくてはならない。そのためには学会館も利用しやすい便利な場所に、談話室、図書室、読書室、会議室、などの施設を備えなくてはならない。

私は若いころ遺憾ながら学会館ならびに学会誌を活用することの少ない者であった。会館もまた、適当な施設を備えていたとは言い得なかった。その償いの意味もあって、さきの学会 40 周年の記念事業に会館建設の議がさまり、建設委員長を押しつけられたときもこれを引き受け、微力をつくした。候補地を物色した結果いまの場所が選ばれ、会館ができたのである。場所は確かに便利であり、広さもたっぷりあるが、建物は予算の関係で当時としてはあれが精一杯の大いさであった。今では狭くて運営上不便となったので、また 50 周年記念事業として増築の議が上がっており、そのための委員会が発足し、再び建設委員に指名されたのである。微力をつくさねばならないと考えている次第である。

名誉員 三輪周蔵

私は大正 4 年、京大工学部土木工学科を卒業し、内務省に就職、昭和 2 年に特別の府県に土木部ができたとき神奈川県初代土木部長に任命され、その後、兵庫県、大阪府の土木部長を勤め昭和 14 年に再び内務省に帰り、横浜土木出張所長に任ぜられ昭和 17 年に退官、京都市土木局長となり昭和 21 年 4 月に退職し KK 銭高組の顧問として今日に至っ

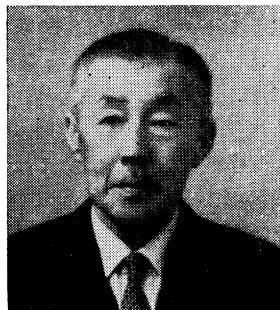
ている。今までの人生を誠に幸福に過ごしてきたことを感謝している次第である。

私が京都市役所を退職後、先輩の辰馬鎌蔵氏から東京に転宅するように、たびたび勧告をうけたが適当な住居がなかなか入手できず、ついにそのままになってしまった。今にして考えれば、あのときどんな無理をしてでも東京に転居しておけばよかったと後悔している。

というのは京阪神地方とくに京都地区に住んでおられる先輩の方はきわめて少なく、また友人仲間もほとんど居住しておられない。したがって先輩に老後の活動生活につき御指導、御援助をお願いすることができないので、老衰の度をますます加えるように思われるし、また余暇に会合して楽しみ合ったり、仕事のうえでお互いに助けあったりする友人がいないことは、実に残念なことと思う。こういうことは人間一生を通じ大変に損なことと考えられる。

要するに人間の寿命を長くすることは元気に活躍することが必要であり、それと同時に愉快な生活することが幸福だと思うので、老後の生活については十分考慮して善処する必要があると思う。

若い間は動く仕事を見つけることも比較的容易だが、老年になるとなかなか困難となり、どうしても先輩に頼み適当な仕事を世話して頂くことが一番有利だと考えるので、青年各位も今から十分に注意の上、最善の策を考えられるよう切におすすめる次第である。



三輪
名誉員

土木工学科に学んで

東北大学 鬼丸幹治

僕が土木技術者をめざした理由には、父が土木の仕事に携わっていた関係で、幼い時からわからないながらも土木工事のいろいろの写真を見て土木にある種の親しみを感じていたことにもよるが、その心を決定づけてくれたのは実は映画であった。

たしか高校 2 年の時であったように記憶しているが、郷里の富山の映画館に「文なし横丁の人々」という映画がかかった。学校の推薦映画というので、この映画を見に行っただが、そのとき付録といった形で併映された映画が実は「佐久間ダム」の記録映画であった。目的の映画はともかく、この付録の映画に僕はひどく感動させられ、すっかり心を奪われてしまった。あの天竜川の急峻な谷間に、発破の音がこだまし、パワーショベルが、ブルドーザーがうなり、ダンプカーが走りまわり、機械力を駆使して自然の姿を徐々に変えて行く人間の力の結集のすばらしさ、力強さに圧倒された。それまで、ツルハシを持って道路を掘り返している土工の姿が土木のすべて、と思っていた僕の考えは、心底からひっくり返されてしまったわけである。

美しいダムが、人々の汗と力の結晶としてでき上がってゆく映画を見て、実にすばらしい仕事だと思い、僕も青空の下で、力一杯この大地と取り組みたいと考えた。僕の「土木技術者になろう」という決心は、あの「佐久間ダム」の映画によって決定したといっても過言ではない。僕の心はあの映画を見たとき以来「建設への魅力」にとりつかれているようである。

さて、今後の抱負だが、僕はいまある建設会社に就職することが内定している。最近、工事の大規模化にともない、計画は官庁に、設計はコンサルタント、施工は施工会社、と

仕事が分業化されてきつつあるような感じがしているが、しかし、土木が住みよい社会を作るための構造物を作ることを目的としている以上、この計画、設計、施工、の総合統一が必要不可欠のことであろう。いやもはや技術の高度化により施工を考えない設計、設計の基礎理論を知らない施工は、できなくなっているのかもしれない。僕はまず、この「設計と施工を総合統一できる技術者」をめざしたいと考えている。

また、最近では、施工の機械化により、土木のあらゆる分野に、科学性が今までの保守性、封建性を取って変わりつつあるようにも思う。この傾向をさらに助長する意味においても、また、時代の要求である工事のスピード化と経済性を満足させるためにも、施工の果たす役割には、大なるものがある。僕は建設会社に入って、この施工技術の向上に力をつくしたいと考えている。技術の向上に、これまで学校で少しなりとも身につけた知識と研究的態度が生かされればと思っている。実際の施工の折にとったデータを、理論的に究明することにより、さらに次の工事によりすぐれた工法が採られることになれば、一般の研究室で行なわれる研究とは、また、別の面での土木技術の進歩が生れるのではないだろうか。しかし、僕の少ない能力では、技術を発展させるまでには至らないかもしれない、だが、ただ仕事をやるだけでなく、常にもっと良い方法良い考えはないか、と念頭において仕事をしたいと考えているし、常に前向きな態度だけは持ちたいと思っている。そして、その結果において何か一つこの地上に、僕が力一杯作った、と胸を張って言える構造物の一つで良いから残してみたいと考えている。その構造物を多くの人々が利用し人々の生活に役立つことになれば、どんなにうれしいことだろうかと思う。その構造物を誰が作った

と人々が知らなくても、蔭に隠れた建設の苦心を人々が知らなくても、土木構造物がほぼ永久的に人々に利用され、愛されることは、土木技術者として大きな喜びである。

僕の小さな努力が土木の進歩に役立てば、それは人間社会の繁栄につながり——いや僕自身の幸福にもつながるのではないかと考えている。

東京大学 加藤 三 郎

昭和 35 年に東大の理科一類に入學した。理科を選んだ理由は、数学が好きであったからである。自然科学にはかなり関心を持っていたが、物理や化学はあまり好きではなく、電気や機械いじりにいたっては、まったく興味をもっていなかった。むしろ歴史や文学を好み、無骨な理科の学生というよりは、感傷的な文弱の徒といった調子であった。

それでも大学に入ったときは、漠然とではあったが、自然科学を学ぼうと思っていたので、入学時から教養学部時代を通して理論科学の研究グループに属し、いわゆる「理論」好きの学友と交際し、科学に対する考え方、さらに社会の諸現象に対する各自の認識を交換しあっている間に、各人の考え方の相違についても注意ぶかくなり、したがって自分の考え方にも無関心ではいられなくなってきたのであった。

このグループに見られた認識の相違の一例は、「原理さえ正しければ結果は当然すべて正しくなるはずだ」とする見方と、「原理は正しくとも結果は必ずしも正しくはならないし逆に原理は正しくなくとも、結果は正しくなる場合すらありうる」とする見方にも現われたのであった。後者は筆者の意見であるが、原理から結果に至る種々の過程での様々な人間的要素の介入を考慮したからであり、その人間的要素にこそ筆者は興味と重要性を見出したからであった。たとえば、数学では $100+200=$

300 と事もなげにやってのけるが、もしも人間が実際に指折り数えて、この加法を不注意におこなったならば、途中で1つや2つは数え間違えないとも限らないし、しかも、このようなきさいな「人間的要素」が世の中に大きな影響をもたらすこともありうることを思えば、事はやはり重大であると考えたのである。

かくして自分が理学部向きの人間ではないことが、次第にわかりかけてきたとき、大学では進學学科を決める時期にさしかかり、またその頃「黒部ダム」や「佐久間ダム」などの一連の大土木工事の記録映画を観たり、また父が戦後一時、土木工事に関係のある仕事をしていたので、幼い頃、よくその現場を見て楽しんだ思い出もあったので、ほとんど迷うこともなく、土木工学科を選んだのであった。

北海道大学 坂本 真 一

私は土木一家の中に生れ、幼少の頃から橋やトンネルの話の中で育った。私自身もそうした話には非常に興味をひかれたし、将来自分もまた一土木技術者としての道を歩むことに、なんらの疑問も持っていなかった。大学において土木を専攻すること2年足らずであるが、これぞ自分の生きる道と常々考えているし、またこの道以外に自分の将来は有り得ないとまでも考えている。

大自然の中にあつて、その自然の猛威と戦いながら、それを克服してきた人類の歴史の根本が、自己の志ぎす天命とあつては、そこに人間としての大いなる生甲斐を感じるとともに、おのずと希望と勇気が湧いて来るのを禁じ得ない。

私の希望は明日の産業文化の動脈とその普及向上の基礎になる高速道路網の建設と、日本人技術者として積極的な海外進出にある。欧米近代国家を見てもわかるように、産業経済の高度化は道路交通の近代化によ

って初めて能率的に達成されるものであって、わが国の実状を考えると確かにその方向を取り違えてきたように思う。敗戦国ではありながら一応世界の文明国として自負しているわが国が、かくも道路交通に立ちおくれしていることは、実際他の文明国から見れば、想像もし得ないであろう。世界の先進工業国が鉄道と海運に頼っていた時代が今から、半世紀も昔であったことを思えば、どれほどわが国が他の部門において勢いこんで見たところで、自動車と航空機による現代20世紀の交通体系を無視しては、まったくの本末転倒であり、その前途は決して明るいものではない。現に道路建設にとまなう用地補償とか第二次補償とかがとかくうるさく問題にされ、工事進行に大きな支障をきたしていることを見聞するにつけ、まだまだ一般社会には道路の経済的社会的な効果や価値に対する認識が不十分でそうした面での苦勞もこれから大変だと思う。それにつけても現代の土木技術者はかつてのように力と技術だけでは不十分であり、もっと大きな見地から国家ならびに社会経済機構を洞察する目を持ねばならないことを痛感する。

次に考えるに今のわが国における技術が、いかに日本人独自の創造性に欠けているかということである。現代の日本は何といても西欧文化という世界に拡がった大きな傘の下にあって、その中で仕事をし、生活を発展させようとしている。特に最近の日本は、文化を道楽の対象として求めているような感を呈するのであって、これはこれから明日の日本を背負って立つわれわれが十分考えなければならないことと思う。ある本で「文化というものは、独自の生活のやり方にいきおひともなってくる人間の教養の発露だ」という言葉を目にしたが、今のところ遺憾ながらわが国は西欧の文化を追いかけ、これを模倣しているに過ぎない。土

木技術においても同様であって、これを克服するためには「和魂洋才」がそれだけに終ることなく、もっと広い視野と自信を持つ必要を感じる。われわれは、そのために島国根性の easy going な生き方を捨てて積極的な海外進出を志すことによって、たび重なる困難にも背を向けることなく、勇気を持って立ち向かい、単に外国技術者に追従するにとどまらず、試練に打ちかって自己の技術を磨くとともに、日本を客観視する努力が必要だと思う。その意味で若戸大橋の完成は、われわれ土木技術者の卵どもにも誠に大きな喜びを与えてくれた。幸いにして私はこの北海道という大自然の中で学生生活を送る機会を与えられ、また先輩に数多くの土木技術者を持ち、そのうえ終生ともに励まし努力し合える友人にまで恵まれたことを本当に感謝している。土木事業は決して一個人の能力による所産ではない。そういった意味で私は、これから人間的にも人格形成に大きな努力を払うとともに、明日の日本建設を旨し先輩諸兄の暖かい御指導のもとに、その一端をになえることを心から希望して止まない。

日本大学 尾富木 健司

「ゴォー」という耳をおおいたくなるような音が大地をかけて、自分の所に到着した。見るまに、いままで自分の前にあった大自然の一部が、変ぼうしてしまった。確か今から3年位前、高校時代の見学旅行の時である。大自然の被服が落とされ、ブルドーザーが走り、カーキ色の服を着て日焼けした人の手が上がると見るまに、まとめられて行く残がい…。

翌日図書館に入って、分厚い土木の書物をみながら、どんな工事でもどれほどち密な計画のもとに施工されているのかを知って、勇気の溢れるのを感じ、また土木工事が見学したダム以外にかくも広範囲であるか

を知って大いに驚いたものである。

まだ小学校に通っていた頃、自分を大変可愛がって下さった先生が常に「縁の下の力持ちになれ」と教えて下さった。自分はこの言葉がいまでも好きである。子供の頃から教え込まれただけに、自分の頭にこびりついているのかも知れない。幼い頃から大きいものに憧れ、大自然の広大さにうっとりとして夢を見ていた自分が、土木に興味を持ち初めたころ、「橋」や「トンネル」が先生の教えて下さった「縁の下の力持ち」そのもののピタリであるのが次第にわかってきたのである。つまり人類が集団生活を営み、文化を享受するための根本施設を造ること、それが土木工事であるとの結論に達したのである。あるとき某設計会社の土木部にアルバイトに行ったことがあった。そこで教えられたいろいろな経験と知識は自分のはやる心に拍車をかけた仕事はドイツ語と英語の説明のついた道路設計の本の図のトレースである。立体交差や地下駐車場など20枚くらいを2週間かかってトレースした図が、青写真ででき上がり、製本されたとき、…その図面の現物がどこにできるのか？ 誰が施工するのか？ 自分のトレースにミスがなかったか？…不安と憧れと喜びが入り交って、自分自身の血がさわいだのを今でもおぼえている。そしてこの不安と喜びが自分の将来の志に大きく自信となり、また大きな厚いカベともなって与えてくれたのである。自分の知る範囲では、日本の土木の現状ではいま、国内至るところに道路工事があり、ダム工事、新幹線工事なども行なわれ、さらに低開発国への技術援助も行なわれている。土木はいろいろな面において洋々たる前途と将来性を約束している。

一生、土木との戦いが続くと思えるが、自分は何としても勝りたいものと考えている。